生徒の読書材選択行動および選択要因の特徴
―有効な読書案内に向けての考察―

桑田　てるみ（慶應義塾大学大学院文学研究科）
t-kuwata@slis.keio.ac.jp

１．研究の背景と目的

学校図書館では、生徒の読書ニーズに対応した適切な「読書のための資料」（以下、調べる本とは区別するために「読書材」とする）を提示し、効果的な読書案内を行う必要がある。他方、生徒が読書をする場合、多様な要因から読書材を選択していると考えられる。また、選択するための行動もさまざまである。実際の図書館での生徒は、書架の間を歩く、表紙を見る、展示を見る、など読書材を選択するための何らかの行動を行っている。このような図書館内でのさまざまな行動には、読みたい読書材を決定する要因（話題の本だから、表紙が気に入ったからなど）があり、その要因と行動には密接な関係がある。そのため、きめ細かく効果的な読書案内を行うには、生徒の読書材選択行動の特徴と選択を決定付けた要因について把握する必要がある。

そこで、本研究は、これまで明確ではなった生徒の読書材選択の行動と要因とを明らかにすることを目的とする。まず、生徒の選択行動や要因の全体的な特徴を把握し、さらに読書量の違いや学年の違いが選択行動や要因に影響を与えているか否かを検討する。また、調査の結果から、生徒の読書材選択を援助するための有効な読書案内の方法を考察する。

２．調査内容

2006 年 6 月に、私立女子校の中学生高校生 1,000 名を対象とした質問紙調査と、学校図書館内での行動観察およびインタビューを行った。

質問紙では、生徒の学年や読書量、図書館内での読書材の選択行動と要因とに関する質問をした。質問紙の項目は、2004 年に実施された全国 SLA の読書調査[1)]をもとに、図書委員の生徒 46 名に対して予備調査を行い決定した。選択行動の質問では、図書館内での行動 6 項目を設け、それぞれの行動をどの程度行うことが多いかを「よくある」から「ほとんどない」までの 4 件法で回答を求めた。さらに、図書館に来館する以前に、「借りたい本や読みたい本を決定していることが多いのか否か」を尋ねる質問を設けた。選択決定の要因の質問では、28 項目について「よくある」から「ほとんどない」までの 4 件法で回答を求めた。

３．分析方法

選択要因に関する分析では、まず調査結果を得点化し平均値を比較することで、重要視されている要因を特定した。さらに要因の背後の因子を確認するために因子分析を行い、各因子が学年や読書量によって影響を受けているかどうかについて分析を行った。選択行動の分析では、質問紙に設けた項目の調査以外に、行動観察にもとづく結果、インタビューによる結果も加味しながら分析を行った。また、選択要因と行動との関連性や、読書量、学年による違いなどについても検討した。

質問紙調査の結果、1,000 名中 945 名からの回答を得たが、図書館を利用しないと回答した生徒 69 名を除外して分析を行ったため、分析の対象とした生徒は 876 名である。また、読書量による違いを分析するため、読書量に関する質問をもとに、生徒を低群、中群、高群の 3 つに分類した（表１）。

表１　読書量の分類

読書量	低群	中群	高群
普段の読書量	０冊～年に 1-2 冊	年に 3-6 冊～月に１冊	月に２冊以上
生徒数	214 人	390 人	272 人

４．読書材選択要因の特徴

4.1　選択要因の平均値の比較

選択要因として考えられる 28 項目につ

いて、その項目を選択の決め手としていることが「よくある」を 4 点、「ときどきある」3 点、「あまりない」2 点、「ほとんどない」1 点として、各項目の平均値を算出した。

1）選択要因として平均値が高い項目

生徒全体で見て選択要因としての平均値が高い項目は、「あらすじ 3.28 点」「シリーズ 3.16 点」「ジャンル 3.10 点」「タイトル 3.03 点」「著者 2.95 点」「表紙 2.93 点」である。次いで、「楽しい本 2.82 点」「TV や映画の原作 2.82 点」「世の中の評判 2.79 点」「新しい本 2.65 点」が高い。

2）読書量・学年による違い

28 項目のほとんどは、読書量高群・中群の平均値が低群の平均値よりも高かった。しかし、「活字の大きさ」「怖い本」「ふりがな」「受験や勉強に役立つ」については、低群の平均値が最も高かった。また、読書量の違いによって各項目の平均値に違いがあるかどうか分散分析を行った結果、18 項目に有意な差が認められた。学年別で有意差が認められた項目は、5 項目のみであった。このことから、読書量の違いが選択要因に何らかの影響を与えていると推測される。

4.2　選択要因の因子分析結果

設定した 28 項目の背景には何らかの共通した因子があると考えられる。そこで、28 項目を対象として因子分析を行い、分析の結果得られた 6 つの因子それぞれに「他者からの推薦」「本の評判」「内容の感じ方」「内容の好み」「本の外見」「読みやすさ」と命名した。それぞれの因子ごとに読書量の違いによる平均値の差があるかどうか分散分析を行った。

「他者からの推薦」の因子には、授業での紹介、先生の推薦など 6 項目が含まれる。これらの項目の平均値は、他の因子に含まれる項目の平均値に比較して低いものが多い。読書量による有意な差が認められた項目は、「図書館からのお知らせ」のみであった。「他者からの推薦」の因子は、読書量にかかわらず、生徒が読書材を選択する際の大きな要因になっていないと考えられる。

「本の評判」の因子には、TV や映画の原作、世の中の評判、名作であることなど、5 項目が含まれる。ほとんどの項目に読書量による有意な差が認められた。この因子に含まれる項目は、読書量中群の生徒の方が他の群よりも高い平均値を示した。

「内容の好み」の因子には、好きな著者、シリーズ、ジャンルなど 5 項目が含まれる。また「本の外見」の因子には、表紙、背表紙、タイトルの 3 項目が含まれる。これら 2 つの因子は、いずれも読書量高群の平均値が他の群よりも圧倒的に高く、読書量による差が最も明確な因子であった。

「内容の感じ方」の因子には、楽しい本、感動する本など 5 項目が含まれる。これらのほとんどの項目には読書量による有意な差が認められない。「怖い本」には、読書量低群が他の群よりも高い平均値を示した。

「読みやすさ」の因子には、活字の大きさ、ふりがな、短い話など 4 項目が含まれる。これらの項目の多くは、読書量低群の方が高群・中群よりも高い値を示した。読書量が少ない生徒は、他の生徒よりも、活字が大きくふりがながあるなど「簡単な本」を選択しようとする傾向がうかがえる。

4.3　選択要因の考察

選択要因として重要視される要因の全体的な傾向は、「内容の好み」「本の外見」「本の評判」である。これらの中でも特に「内容の好み」「本の外見」は読書量高群の生徒が他の群よりも気にかけている要因である。また、中群の生徒の場合は、高群の生徒よりも「本の評判」の情報をもとに読書材を選択する傾向が強いこと、低群の生徒は「読みやすさ」を気にすることが多いことなど、読書量による選択要因の差が確認できた。

読書量の多い生徒は、多くの読書をすることで、自分が好きな著者やシリーズなど、自分の好みを把握しており、その情報をもとに読書材を探していると推測される。一方、読書量がそれほど多くない生徒は、ベストセラーや映画になった話題の本など、一般的な読書の情報をもとに読書材を選択しようとする傾向があると推測される。

また、先生の推薦や授業での紹介など、「他者からの推薦」の要因を重要視して選択する生徒は総じて少ないことがわかった。

この原因の一つとして、他者から推薦されることが少ないために選択要因となることも少ない、という可能性も考えられる。この調査結果だけでは、その原因を特定することができないが、いずれにしても、推薦や紹介などの読書指導の在り方について再考する必要性が示されたといえよう。

５．図書館内での選択行動の特徴

5.1　読みたい読書材を決める場

借りたい、あるいは読みたい読書材を決める場合、来館する前にすでに決めている生徒は 30.3%であり、69.7%の生徒が「図書館に来てから決める」と回答している。

この結果は「読書量」の低群、中群、高群との間に差は認められなかった。また、「学年」による違いもなかった。このことから、生徒の多くは、図書館内で読みたい読書材を決定しており、あらかじめ読書材を特定して来館しているのではないことがわかった。インタビューの結果でも、「図書館には何か面白い本がないか、探しに行く」「図書館に行けば何かありそうだ」としており、図書館が読みたい読書材を探し出すための場となっている様子がうかがえた。

5.2　選択行動の結果

１）自分で探す行動

来館した際に、「本の場所を聞く」ことが「あまりない」「ほとんどない」生徒は 70.8%であった。また、「本の場所はだいたいわかるので直接本棚に行く」ことが「よくある」「ときどきある」と回答した生徒は 50.0%であった。多くの生徒は、読書材の所在を尋ねたり、調べたりする行為をあまりせず、直接書架に向い、自分の力で探そうとしているようである。

「面白い本を探そう」とする場合も、76.5%の生徒が「ぶらぶらと探す」ことが「よくある」「ときどきある」としており、「面白い本がないか尋ねる」ことが「よくある」「ときどきある」生徒は 41.4%にとどまった。このことから、面白い読書材を読みたいと思っても、他人に尋ねることが少ない姿が浮かんだ。自分で探したいという気持ちの表れではないかと考えられる。

２）展示を眺める行動

図書館内で「展示をながめる」ことが「よくある」「ときどきある」生徒は 65.3%であり、多くの生徒が展示を眺めているということがわかった。「ぶらぶら探す」と回答した生徒の 61.3%が、「展示をながめる」と回答しており、両者にはかなりの相関（r＝.600**）があった。生徒の多くは、図書館に来て、ぶらぶらと展示を眺めながら読みたい読書材を決めているものと考えられる。

生徒は、図書館に来る前に読みたい読書材が決まっているかいないかに関係なく、「展示をながめる」「ぶらぶらする」「返却された本をながめる」という行動をとっていた。つまり、たとえ目的の読書材が決まっていても、図書館内では展示を見てぶらぶらする行動をとっていると推測される。インタビューによると、「展示してあるとつい見てしまう」「面白そうな本が展示の中にあることが多い」「自分が知らない本が出ている」など、自分にとって未知の読書材との出会いを展示に求めているようである。

また、返却本コーナーを眺める行動について、生徒は「他の人が借りた本は面白そうだから、よく見る」「返却本コーナーで本を見つけると面白い本が多い」としている。

生徒は、なるべく失敗せずに面白い読書材に出会うチャンスとして「展示された本」「返却された本」を捉えているようである。

5.3　読書量・学年と選択行動との関係

「月に 7 冊以上」の読書をする非常に読書量の多い生徒の 60.7%は、「本棚に直接行く」ことが「よくある」生徒であった。これらの生徒は、図書館の常連でもあり、書架の配架状況もよく把握しており、自分で読書材を探し出そうとする傾向が強いと推測できる。行動観察の結果でも、これらの生徒は、まず特定の書架に直接向かうことが多いようだが、それ以外の生徒は、図書館内のさまざまな場所を見て歩く傾向にある。質問紙に示された行動について、読書量が多い生徒ほど「よくある」と回答することが多く、活発な行動が確認できた。

学年別の行動の違いを見ると、中学生 1 年生の方が高校 3 年生よりも図書館内で活

発に行動している。これは年齢の違いが影響しているのか、あるいは図書館に最も近い学年が中学１年生であり、最も遠い学年が高校３年生であるという地理的な理由に影響を受けているのか、この調査だけでは判断できなかった。

5.4　選択要因と選択行動との関係

「ぶらぶらと探す」行動と選択要因との相関関係の分析を行った。選択要因のうち「あらすじ」には、かなりの相関（r＝.414**）があった。また、タイトル（r＝.360**）、表紙（r＝.346**）にもやや相関があった。行動観察では、ぶらぶらと探しながら、書架の前に立ち止まり、裏表紙に書かれているあらすじを確認したり、帯が添付された部分を確認したりする行動が頻繁に観察された。インタビューでは、表紙のイラストが気になるという生徒も多かった。

「展示をながめる」行動と選択要因との相関関係を分析した結果、あらすじ（r＝.382**）、図書館からのお知らせ（r＝.366**）、表紙（r＝.342**）、新しい本（r＝.341**）にやや相関が見られた。展示を眺めることは、単にぶらぶら探すこととはやや目的が違い、「新しく入った本」「図書館からのおすすめの本」の確認という認識もあるのだろう。

「あらすじ」と「表紙」の両選択要因は、ぶらぶら探す行動と展示を眺める行動との双方に密接に関係していた。生徒は、これらの選択要因を確認することを目的として行動していることが多いと考えられよう。

６．読書案内に向けての考察

生徒が自発的に読書をするためには、自らが読書材を選択できなくてはならない。そのため、学校図書館では、生徒が読書材を選択しやすいように、生徒の選択行動と要因の特徴にもとづいたきめの細かい読書案内を行うことが有効と考えられる。

選択行動の調査結果では、図書館に来る前に借りたい読書材が決まっている生徒は少数であった。来館した時点での情報要求は明確ではなく、館内をぶらぶらする行動や展示を見る行動によって情報要求が明確になる事が多いようである。また、生徒は、他人に尋ねたりせずに直接書架に向かい、自分で探そうとする行動が多いことがわかった。学校図書館における読書案内方法が、面白い読書材を尋ねてくる生徒に応答する相談型の読書案内[2)]だけでは、多くの生徒の行動に対応できない。そこで、学校図書館は単に要求に答える場としてだけでなく、要求を明確にする場、あるいは要求を掘り起こす場として機能すべきである。同時に、図書館外での読書ニーズをどう掘り起こすのか、援助の方法を模索する必要もあろう。

選択要因の調査結果では、「あらすじ」「表紙」をもとに読みたい図書を選択する傾向が、多くの生徒に見られたことから、図書館内では、なるべく多くの表紙を見せるような提示型の読書案内を増やす必要があろう。同時に、読書量がそれほど多くない生徒が気にかける項目、世の中の評判、TVの原作などの情報も提示することが有効だと考えられる。例えば、書店の平置きと同様の展示方法、あらすじや話題性を示すポップなどを学校図書館でも積極的に取り入れる必要がある。さらに、読書量低群の生徒は簡単に読めるものを求める傾向があったため、読書力レベルについても考慮した提示内容が必要となるであろう。一方で、教員の推薦など「他者からの推薦」を選択要因とすることが少ない状況をどう捉えるのか再検証することが、教育現場の学校図書館としては必要である。

７．おわりに

本研究では、生徒の読書材選択行動の特徴と選択の要因を明らかにし、読書量や学年が行動と要因とに与える影響について検討した。さらに、効果的な読書案内に向けての考察を行ったが、一女子高の傾向であることに限界がある。今後、別校種の生徒の読書材選択に関する調査と合わせ、総合的に分析を行っていく予定である。

注・参考文献

1)全国 SLA 研究・調査部.第 51 回読書調査報告.学校図書館.No.661,2005,p.12-52.
2)伊東達也.公共図書館における提示型読書案内.図書館学.No.81,2002,p.12-20.　のなかで、相談型読書案内と提示型読書案内とに触れている。